仏の時間と凡夫の時間の章

いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり。丈六金身これ時なり、時なるがゆへに時の荘厳光明あり、いまの十二時に習学すべし。三頭八臂これ時なり、時なるがゆへにいまの十二時に一如なるべし。十二時の長遠短促、いまだ度量せずといゑども、これを十二時といふ。去来の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せざれどもしれるにあらず。衆生もとより知らざる毎物毎事を疑著すること一定せざるがゆへに、疑著する前程、かならずしもいまの疑著に符号することなし。たゞ疑著しばらく時なるのみなり　。

仏の時間と凡夫の時間の章では、仏道元の宗教的時間と凡夫の時間を二つに分けて、時間論を明らかにする。「いわゆる有時は～十二時に一如なるべし」までが、仏の悟りの時間。「十二時の長遠短促～ただ疑著しばらく時なるのみなり」が凡夫の日常時間である。道元は凡夫と仏の二つの時間が蔵身する時間の世界を説示する。

前章の「蓋時」章は身心脱落した仏の正法眼から、自己並びに森羅万象が蓋時の現成であることを述べた内容であった。本章は仏が体現する、蓋時の宇宙世界を明らかにするための導入部である。

「いはゆる有時は、時すでにこれ有なり、有はみな時なり」

本文は有時の真実世界の解明である。道元が当に観る有時の世界を開示する。過去における、多くの解説書は時間即空間の即一性を説き、仏位から眺めた有時の時間の世界を明らかにする。有はみな時なり。自己も万物も蓋時であること説き示す。時即有、有即時、自己と万物一切は蔵身であり、蓋時と尽現の二つに分けただけで、本来は蔵身なのである。ここは、自己・空間・時間・存在物・実相が不二円融している。たんなる、凡夫の時間の世界でない、仏の蓋時の時間観を次の文で明らかにする。

「丈六金身これ時なり、時なるがゆへに時の荘厳光明あり、いまの十二時に習学すべし。三頭八臂これ時なり、時なるがゆへにいまの十二時に一如なるべし」

丈六金身とは、丈六八尺のことである。釈尊の尊体のことであり、果であり、仏の全体相であり、証上である。一丈六尺のお釈迦様の現成も蓋時である。脱落した仏の自己も蓋時である。蓋時の働きがあるからこそ、妙修の全体である、発心、修行、菩提、涅槃の、行持道環なのである。時が現成するから、一切の万物が荘厳となり、光明を発するのである。今の十二時である、二十四時間の真相の全体とはどのようなものか、時間

の本質を参学すべきである。

「三頭八臂これ時なり時なるがゆへにいまの十二時に一如なるべし」

前に説明したように、釈尊の丈六金身の尊体も蓋時であり、不動明王のように、怒った自己も蓋時である。自己の身心全体が、蓋時なのだから、他の世界に時間はなく、自己の存在が時間そのものの顕在なのだ。

「十二時の長遠短促、いまだ度量せずといゑども、これ十二時といふ」

道元は凡夫の時間への無関心と無知を鋭く指摘する。長遠短促とは、時の長短のことで、時間の長さが、永遠なのか刹那なのか、度量とは思い測ること。凡夫は、真実の時間知ることはできない。知る知らないにかかわらず、それでも、蓋時の十二時の時間には変わりはないのである。

「去来の方跡あきらかなるによりて、人これを疑著せず、疑著せざれどもしれるにあらず。衆生もとよりしらざる毎物毎事を疑著すること一定せざるがゆへに、疑著に符合することなし。ただ疑著しばらく時なるのみなり」

凡夫の時間観は一方向に進行する、過去→現在→未来へ、生→死の去来だけが、一切の時間の世界と思え込んでいる。そのことに対し疑問や疑念を持つことはない。だからといって、真実の蓋時の世界を理解しているわけではない。始めから、凡夫は時間や物の本質に対して理解がない。当然、万物の一物一物のありようも、疑う心が無く物事の本質を見抜く正眼などあるわけはないのである。そのため、真理と一体になることはありえない。疑問がないとか、一体でないからと言って、時そのものではないと言うことではない。なぜなら、すべてが蓋時その物であるからだ。